****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 152 号
−環境・農業・食べ物など情報の交流誌−
2005.02.10（木）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
＜キーワード＞
環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所＆『電子耕』編集同人が編集・発行。
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm
**********発行部数　1451　部**********

□　目　次　　□----------

＜今週の提言＞世界的な協力で震災復興を　松坂正次郎
＜旬を食べる―野良からの便り・17＞“レンコン”　小泉浩郎
＜日中友好の環を引き継ぐ新体制スタート＞
＜79 歳の意見＞　日中友好交流十余年を顧みて
　　人と人との心の交流が、恒久平和の礎　原田　勉
＜ミニ解説＞農業・農村の組織とその役割（３）
　　―農事実行組合―　石川秀勇
＜農文協図書館情報＞（2004/01/31 更新）　農文協図書館・原田太郎
＜編集後記・同人の近況報告＞１月 27 日ー２月９日

＜今週の提言＞世界的な協力で震災復興を

地球をふくむ宇宙空間がおかしくなっているためか、スマトラ沖大津波（海底地震）や新潟中越地震などが発生している。これは、世界人類が宇宙や地球の痛みも無視して、環境破壊の最たるものである戦争や紛争に没頭し、あるいは温暖化ガスをむやみに放出しているため、神の怒りを将来しているのか。

地球上の生きとし生けるものが、いつ、なんどき、かつて経験したことのない大震災、大津波、火山の噴火・爆発によって壊滅的打撃を受けるのか全く予想がつかない。しかし、世界の人類がこれまでの体験に即し、進歩している科学・技術を総動員し、協力して、その打撃を最小限に食い止める努力を続ければ、ある程度におさえることは可能であろう。

スマトラ沖大津波による死傷者・被害者の数や被害の広がりを考えれば、「小」は与野党の政争や「大」はイラク戦争やイスラエル・パレスチナ紛争、

インド・パキスタンの対立なども、やっている暇はないのと違うか。イラク派遣の自衛隊も復興支援をしているのであって、戦闘には立ち入らないというのなら、“転進”も考えて、今次震災の復興に振り向けられないものか。

わが国は今こそ、国連憲章と日本国憲法に則り、国連による救済・復興プログラムに全面的に協力し、人々の苦難に立ち向かう日本をアピールする好機である。こういう人類的苦難のときこそ、人々は心を和らげることが出来るものであるのだから。

松坂　正次郎
山崎農業研究所会員・「農政と共済」コラムニスト
y.nouken@taiyo-c.co.jp

＜旬を食べる―野良からの便り・17＞“レンコン”

レンコンは蓮の根、レンゲは蓮の華、ハチスは蓮の果実である。小さい時「ひいらいたひーらいた、何の花ひーらいた、レンゲの花ひーらいた」のレンゲはレンゲソウだと思っていた。「はちす」を漢字転換すると「蓮」となるのも初めて知った。

レンコンを当地の幼児語で「メドメド」といった。「メド」とは小さい穴の方言で、メドがたくさんあるから「メドメド」だ。正月を中心に冬の間よく煮物やてんぷらとして食卓に載った。サクサクと周りを食べ、最後に歯車の形が残った。だが、この遊び心の食べ方は、行儀が悪いとよく祖母に注意された。

レンコンは、霞ヶ浦周辺が主産地である。華の時期には、多くの観光客が訪れ、その神秘的な姿に酔いしれる。穴があいているから「見通しが利く」、芽が上に向くので「運が上向く」と縁起物として評価されている。しかし、その栽培は大変である。特に収穫は寒風の中、胸まで泥に埋まって行う。泥田はそんなに深いのか。実は、作業は立膝でホースの水圧で掘り起こす。だから胸までつかり這うような作業となる。

掘り起こしたレンコンは、小売店頭では節ごとに売られている。だが、どういう訳か出荷は、３ー５節をつけて長い形態である。そのため節のところで折らないよう細心の注意が必要になる。

54 年前、東京大学農場の地下青泥層から３粒のレンコンの種子が掘り出された。2000 年前のものだという。発見者大賀一郎博士に因み大賀蓮と呼ばれている。その一粒が華を咲かせ、その子孫が各地で新しい命を紡いでいる。その蓮を苦労を重ね「古代蓮根」として商品化した男がいる。有坂照章さん（千葉）である。残念ながらまだ食していない。

小泉　浩郎
山崎農業研究所事務局長
y.nouken@taiyo-c.co.jp

＜日中友好の環を引き継ぐ新体制スタート＞

日中両国の関係悪化が心配されている近頃ですが、同じ志を持つ日中友好の会があります。このほど十周年を経て新しい体制に若返りました。
（以下、下田博之前代表のあいさつより要約）

東京農工大学中国同窓会と友好を深める会（農工大日中友好会）は、日中両国の農工大学同窓会が互いの国の農工業の発展に寄与する。科学技術の交流を深めることを目的に、1994 年に発足し、昨年で、満十年を迎えました。

この 10 年の間、毎年訪中団を結成し、中国各地で開催された。農工大中国同窓会総会に出席し、訪問した研究・教育機関は、北京市農林科学院を皮切りに、同じく北京市蔬菜研究所、浙江農業大学農学部、東北農業大学、上海理工大学、雲南農業大学、北京理工大学、瀋陽農業大学、そして昨年は満十周年記念として、梶井功前学長先生を訪中団顧問に、赤城昭治団長のもと 21 名の訪中団を結成し、北京市にある。中国農業大学および成都の四川大学を訪問しました。

訪問した各大学はいずれも農工大学と姉妹校を締結しており、学長はじめ、幹部の先生方に農工大卒業生も多く、熱烈歓迎の中で、親しく交流を深めることができました。

日中間の大学を通した研究・教育交流は日増しに発展しています。農工大学と姉妹校を提携している中国内の大学は年々増加して十数校に達し、中国からの留学生も 200 名を超えるまでに増加したとのことです。

友好会発足十周年を過ぎて、両国会員の年齢も年々若返っています。本会の活動も、この節目の年を新たな出発点としてさらなる発展を目指して、平成 17 年度より、次の方々に三役を委ねることになりました。

代　表：板橋久雄（東京農工大学大学院教授）
副代表：早川潔（日本農業新聞論説委員）
事務局長：淵野雄二郎（東京農工大学大学院教授）

東京農工大学中国同窓会と友好を深める会
http://jc-yuko.gr.jp/

顧問：原田勉

＜79 歳の意見＞　日中友好交流十余年を顧みて
人と人との心の交流が、恒久平和の礎

現在の小泉政権の対中国政策は、靖国神社問題に見られるように、日本国民の真の日中友好の考え方を代表しているようには思われない。中国の対外貿易で、日本は第一になり、対アメリカの貿易額をしのいでいる。

今後、日本にとって中国はアメリカに劣らず重要な友好国でなければならないと思う。

この時にあたり、私の日中交流十余年の経験を顧みて、草の根運動のまとめをしておきたい。

私が初めて訪中したのは、天安門事件の直前、1989 年の 5 月であった。
農文協の日中交流の手はじめに、「沙漠をみどりに」というテーマで、日中合作の映画製作をすることであった。同時に、中国農業科学院の中に、日中の農業科学技術交流のための文献陳列室を開設する仕事であった。

農文協が中国との交流・支援活動を行う根源は、侵略戦争の最大の被害を受けた中国に対する贖罪の義務を果たすことであった。日本の村の伝統である「親のかけた迷惑は息子が償わなければならない」の道義である。

これに基づいて 1986 年以来、日本農業書籍の寄贈運動、農業書翻訳出版推進、農業農村発展計画の作成、両国の農家同士の本格交流などが続けられている（このことにより、2003 年中国国務院から「友誼奨」が授与された。

農文協の中国支援・友好事業に参加するかたわら、個人的には、劇団文化座の訪中友好団を組織したり、農文協の関連会社が、クラス会の友人と共に中国各地の旅行をした。　なかでも最も重点を置いて継続しているのは、東京農工大学の同窓会を基にした農工大日中友好会の交流活動であった。

この交流の始まりは、天安門事件の後、中国農業科学院からの国慶節に招待された農文協の坂本専務と私が、北京市農林科学院を訪問したのがきっかけになった。その時の前院長の宋秉彝先生が、戦時中農工大学の留学生であったという関係である。

1944（昭和 19）年、に当時の東京高等農林の中国人留学生は十数人いた。それらの人と連絡を取って、1994 年に、東京農工大学同窓会北京支部を設立することになった。そして翌年の 1995 年 1 月に、「東京農工大学中国同窓会と友好深める会」が東京で発足した。

昨年満十周年を迎えた科学技術交流の成果は別項ニュースにあるとおりである。

この友好交流は、中国人留学生であった人と、日本から中国同窓会に出席した人が、相互に、何度も何度も、それぞれの国の各地を訪問して、日本人と中国人の心の交流を重ねた。

この双方の交流の旅は、必ずある期間を寝食を共にし、あるいは同室に泊まることによって、日中の歴史と文化について語り合い、各個人の考えを述べ合うことによって、お互いを認め、信頼が生まれた。

日本人の考えの根底には、中国への侵略戦争への贖罪があった。同窓生の親や兄たちが日中戦争に駆り出され、中国人に迷惑をかけたという意識があった。それは、中国人同窓生にも理解され友情は深まった。

私のささやかな十余年の体験であるが、結論は、人と人との心の交流が 21 世

紀の恒久平和の基礎であるということである。

　農文協の中国支援事業、農工大の日中友好活動の今後の発展に期待するものである。

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人
原田　勉
http://nazuna.com/tom/

＜ミニ解説＞農業・農村の組織とその役割（３）―農事実行組合―

　隣組は、そこのすべての家でつくる組織（近隣集団）ということですが、農事実行組合は、そのうちの農家が農業を共にしていく必要からの機能集団ということになります。

　トラクタの利用が今のように普及する以前の、畜力耕などによる時代のことをイメージされると容易に想像されるように、農業には労働力の交換、共同施設や農具の共有、共同防除、農業資材の共同購入、農産物の共同出荷、等々集団での活動を少なからず必要とする面があります。そうして、１９３０年代（昭和１０年前後）に、この農家が集団で農事活動する組織として「農事実行組合」が法制化され、戦後「農協」制度の誕生とともに、法制的には解散させられた。農事実行組合には、遡るとそういう歴史がある、と言われます。

　農事実行組合（名称は農事組合、農家小組合など様々）の組織は、隣組ないし区に重なり合ってつくられ、それが今も維持されていて、役場からの農政の浸透組織であったり、農協の下部組織としての機能を果たしているようです。農業がそれなりに行われているところでは、こうした必要性は高いですから、それがむしろ普通であるのではないかと思います。

　農業では、補助事業の活用をどこでも活発に行ってきていますが、その実施に関わる意向の取りまとめなども、この農事実行組合に下りてきて、というのが一般的なパターンと言ってもいいかも知れません。また、米の生産調整に係る減反政策への対応（集落営農）についても、農事実行組合のマターになっているかと思われます。

とは言え、農事実行組合は、出だしは多分に「相互扶助」に基本をおい慣習的組織で、加入・非加入は任意とする組織と言って良いでしょう。しかし、地区の農家であれば非加入などというわけにはいかず、また組合の役員ともなれば、今日的な相当に重い役割を担う。そういう面が、農事実行組合にはあるように見られます。

石川　秀勇
山崎農研会員、野田市在住
y.nouken@taiyo-c.co.jp

＜農文協図書館情報＞（2005/1/31 更新）

◆2004.12.1-12.31 登録の新規収蔵図書
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/01new.html

◆ニュース１：テーマ別陳列棚新設・新規収蔵図書棚拡張
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/sp/2005/01/news1.html
テーマ別陳列棚新設を新設し、初回特集として、「増刊現代農業」を
テーマ別に陳列しました。

◆ニュース２：農業センサスを別館５階書庫に移設しました。
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/sp/2005/01/news2.html

◆話題の図書：
『だれでもできる エクセルで農業青色申告（農業会計ソフト付）』
　消費税対応・経営分析もできる農業会計システム
　　著者：塩　光輝
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai027.html
☆付録ソフト●Ｍｉｃｒｏｓｏｆｔ　Ｅｘｃｅｌ2000 以降対応
農家への青色申告、農業会計講習会を長年続ける中で改良を重ねてきた
青色申告ソフト。
基本になる日々の取引をエクセル上で仕訳入力していけばはぼ自動的に
青色申告に必要な帳簿類が出来上がる！

2005/01　農山漁村文化協会　発行

農文協図書館　　IT 担当　原田太郎
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/

＜編集後記・同人の近況報告＞１月 27 日ー２月９日

小学１年の長男が風邪をひいて寝込んでいる。熱が高く、見ているこちらが暑くなりそうなくらい赤い顔をしている。子どもの頃、わたしが病気をしたときに母親がつくってくれたのが卵がゆであった。枕元に新聞紙を敷き、その上に土鍋をおいて、「ふーふー」と冷ましながら食べさせてもらったことを覚えている。土鍋で熱を通した卵の味は、目玉焼きとも卵焼きともちがって、わたしの好きな味であった。体がよわっているときに食べるので、よけいに美味しく感じたのかもしれない。これは 30 年以上前の話であるが、卵はいまほどは日常的な食べ物ではなかったように思う。滋養強壮にいい特別な食べ物とでもいったらよいか。ともあれ、長男にははやく良くなって、卵でもなんでもどんどん食べられるようになってほしいと思う。（山崎農業研究所会員・田口　均）

◎お願い「＜読者の声＞の投稿規定・メールの書き方」

１、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
２、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
３、１回１テーマ、10 行位に。
４、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
５、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。
http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html
インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

y.noken@taiyo-c.co.jp
となっております。投稿される方はこちらのアドレスにお願いします。

次回　153 号の締め切りは２月 21 日、発行は２月 24 日の予定です。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45『メールマガジンの楽しみ方』
著者：原田　勉　定価：735 円　発行日：2002 年 10 月 4 日
発行所：岩波書店　ISBN4-00-700045-X
まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら
http://nazuna.com/tom/book.html

『電子耕』から大切なお知らせ
http://nazuna.com/tom/denshico.html
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html
＜本誌記事の無断転載を禁じます＞

****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 152 号
バックナンバー・購読申し込み／解除案内
http://nazuna.com/tom/denshico.html
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html
2005.02.10（木）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp
**********ここまで『電子耕』**********

.